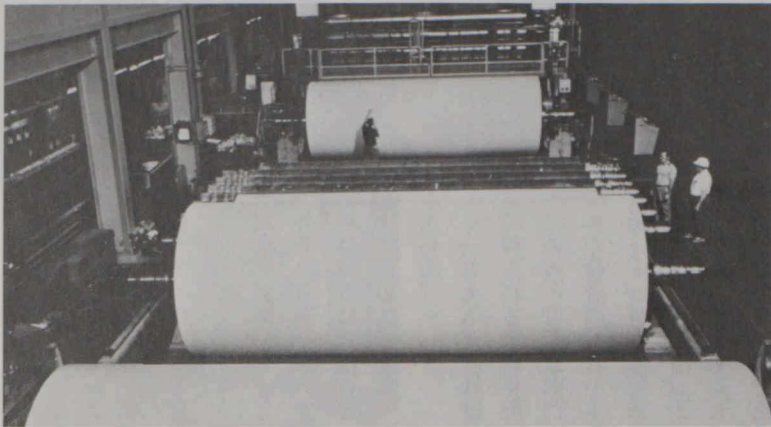


いるのは、工業製品に対する国内需要の約三パーセントを輸入に頼る一方、国内工業生産の約三〇パーセントを製品輸出している事実が反映されている。したがって、製紙などの部門では大幅な赤字となり、機械その他の資本財では大幅な赤字が出るというアンバランスは残るにせよ、カナダにおける製造部門の生産量は、実質的に同部門に対する国内需要量とはほぼ等しくなっているわけである。

製品輸出の中では、組立品と完成品の占める割合が伸び続けている。この両者で、一九六〇年にはカナダの輸出全体の六〇パーセントを占めたが、七八年にはこれが七三パーセントに増加した。とく



ケベックの製紙工場

に完成品の輸出増が大きく、六〇年の八パーセントから七八年には三六パーセントへと大幅に伸びている。

二次大戦後における生産性の伸びも著しく、米国の伸びをはるかに上回っている。人時（マンアワー）当りのカナダの生産量は、一九四六年以降現在まで、年平均四・一パーセントの伸びを示した。それに対し、同期間における米国製造業の生産性の伸びは、二・七パーセントにすぎない。その結果、米加間で指摘されていた製造業における生産性のギャップは、かなり埋められることになった。これはとくに耐久財の場合に著しい。

製造部門の主要業種は、ほとんどがカナダ特有の経済環境や地理的条件から生まれたものである。たとえばカナダの得意とする運輸通信機器は、広大な国には不可欠のものであったし、林業や鉱業あるいは石油産業に使われる加工処理機器の製造能力は、資源開発の進行と並行して発達してきた。同様に石油化学、非鉄金属、農産物などをベースとする二次産業の発展も、豊富な原材料の存在を考えると当然のことといえるだろう。

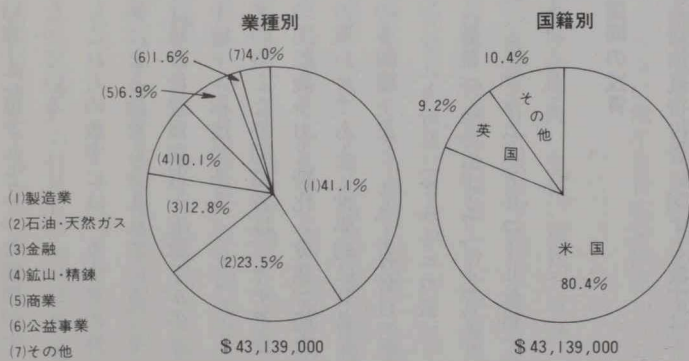
カナダの実質国民生産に占める製造業の割合は、八〇年代中に二・五―三・〇パーセントふえるものと予測されている。これはとくにカナダ製造業の国際競争力向上にもとづいて出された数字である。製造業のなかで平均以上の成長が見込める業種としては、運輸機器、電気製品、化学品、金属加工、一次金属、機械などがあげられる。

外国直接投資と対外投資

カナダは、世界中のどの国よりも多額の外国資本を受け入れている。これはカナダが昔から外資に対し開放的な態度をとってきたこと、また為替管理がなく、カナダ経済の実績からして非常に魅力ある投資先となっていることなどの理由によるものである。最近の統計によると、カナダ製造業の五六パーセントが非居住者の支配下にある。

しかしその反面、カナダ自身が有力な海外投資者であることは意外に知られて

カナダにおける外国直接投資(1976年)



いない。カナダ企業の実力と国際競争力はすでに高い水準に達し、これが積極的に海外へ進出する傾向を作っている。

カナダにおける外国直接投資の公式統計は、一九八〇年五月に統計庁が発表したのが一番新しい。対象は一九七六年であるが、これは諸外国と異なり、カナダには外国為替管理制度がないので、正確な数字を集計するにはこのようなタイムラグを余儀なくされるという事情による。

この統計によると、七六年末の外国直接投資残高は帳簿額で四百三十一億ドル。外国直接投資とは、カナダ企業に対する外国投資で、その規模あるいは性格からして、外国投資家が経営を左右しない支配する潜在的可能性をもつ場合をいう。

国別に見ると、米国が圧倒的な差で一位を占め、投資総額三百四十七億ドル、カナダの外国直接投資全体の八〇・四パーセントの実績をもつ。二位が三十九億ドル、全体の九・二パーセントのイギリス。三位が七億四千六百万ドルのオランダ、すぐ続いて七億四千二百百万ドルのフランス。その後に西ドイツ（六億一千万ドル）、スイス（五億八千六百万ドル）、ベルギー／ルクセンブルグ（五億八百万ドル）、そして八位に日本（二億九千三百万ドル）がくる。

外資が集中しているのは製造部門で、外国直接投資全体の四一・一パーセントを占める。そのほか石油・天然ガス（二・三・五％）、金融（二・一・八％）、鉱山・精錬（一・〇・一％）も外資の集中する部